

## 報告 7

# 災害復興支援を通じた地域連携 Keiwa HOPEの「しばたサマーフェスティバル」参加の 振り返りからみる学生が地域連携によって得るもの

池 田 し の ぶ

## はじめに

ボランティア元年と言われる阪神・淡路大震災（1997）の後、まず関西方面において設立がすすんだ大学ボランティアセンターは、2016 年末現在、155 カ所となっている。<sup>1)</sup>それは、2006 年の教育基本法の改正により大学の地域貢献が法制化され、正課にボランティアまたはサービスマーケティングをもうける大学が増えたことや、学生の、東日本大震災以降全国で頻発するようになった災害復興支援への関心の高まりによるものとみることができる。学生と地域をつなぐ機能を、地域連携センターという名称で設置する大学もあり、同様の機能をもつ拠点でもその重点のおきかたにより、「ボランティアセンター」「サービスマーケティングセンター」「地域貢献センター」などの名称がある。

本学のボランティアセンターはこれらの流れに先駆けて開設され、大学のミッションと強く結びつく形で、全学必修のボランティア・ウィーク（1，2 年）を、ボランティア・デイ（1 年）として正課に位置づけ、ゼミ・ボランティア体験（2 年）として継続することによって、学生が地域に出かける機会を確保してきた。また学内においてはボランティア論・学習セミナーや、ふれあいバラエティをはじめとするボランティア関連事業の運営を行い、日常的には、ボランティア活動をしたい、してみたい学生の相談にのり活動先につなぐこと、学外からのボランティア活動者募集情報を広め活動者を募集し、それをコーディネートすることなどを業務とし、ボランティアに関する地域連携の拠点としての役割を果たしてきた。さらに東日本大震災後には、災害復興支援への関心の高まりに応じて、特に災害復興に関するコーディネーション業務に注力するようになった。

ここでは 2017 年度から出店してきたしばたサマーフェスティバルの 3 年間の活動を報告し、学生が災害復興支援を通して地域と連携することの効果について若干の考察を加えたい。

## 1. Keiwa HOPE について

Keiwa HOPE は、2011 年 3 月 11 日に起きた東北地方太平洋沖地震による東日本大震災の復興支援を行うため 3 月 17 日に結成された学生、卒業生、教職員によるグループで

あり、本学が行うボランティア活動プロジェクトの総称である。この Keiwa HOPE の名称は、Keiwa for Helping Other People の略で、教務課職員皆川氏の発案によるものだ。筆者はボランティアコーディネーターとして、Keiwa HOPE の発足から 8 年間にわたり活動を支援してきた。この活動はもちろん、共感し協力してくれた学内外、地域の人々の理解と支援があってこそそのものだが、2015 年に発足した学生 HOPE や、継続的かつ精神的に活動に参加し深化させていった多くの学生の存在、またボランティアセンターに常駐し活動全般をサポートする職員の存在が推進力となり、さまざまなかたちで発展してきた。注目すべきことは、熊本地震が発生した 2016 年度から、地域でのイベント出店に力を注ぎ、「食べることでできる支援」を提唱しながら震災の風化防止に努め、全国各地で次々と発生する自然災害の現地活動を含む支援活動も展開していることである。

Keiwa HOPE の活動は、その活動の特徴から 3 期にわけることができる。第 1 期は、活動の立ち上げと東日本大震災への支援活動を行った時期で、2012 年度と 2013 年度に実施していた、岩手県や宮城県での現地活動や、毎月 11 日のある週に 5 日間連続で行う募金週間による義援金集め、その義援金を用いた被災幼稚園への遊具の寄付や、NPO 法人遠野まごころネットが行っていた「まごころサンタ基金」への寄付が主なものである。震災の記憶が生々しく、復旧、復興状況についての報道も頻繁になされていた時期であり、それゆえ、支援への意欲も高かった。

第 2 期は 2014 年度と 2015 年度の、復興支援インターンへの参加や、新潟恩返し隊の活動への参加である。災害復旧のフェーズが、人々の「心の復興」を重視する段階へと変わっていく時期にあたり、震災に関する報道も減り、「風化」という言葉が現実味をもって語られる時期であった。復興支援インターンでは、学生たちは震災の風化を防止するためにどうすればよいのか、遠く離れた新潟でできることは何かを、被災企業でのインターンシップを通して考え、その方法として、学園祭や学食で被災地の食材をアピールする活動を行ったり、チャペル・アッセンブリー・アワーを活用した学内での報告はもちろん、国連世界防災会議（2015 年 3 月）を始め、インターンシップフォーラム（2017 年 2 月）など学外での報告も数多く行ったりした。

そして、第 3 期は、東日本大震災の風化を背景としながら、2016 年 4 月に発生した熊本地震への支援活動を契機とする、各種イベントへの出店と市民への支援の呼びかけや、熊本、広島など西日本での支援活動を行っている、現在に至るまでの時期である。2016 年には、熊本地震発生時に、国立療養所菊池恵楓園への飲料水支援や、募金活動を行った。また NPO 法人にいがた災害ボランティアネットワークの支援により、当時 3 年次生の学生 2 名を熊本県御船町に送ることができた。イベント出店では、しばたあやめ祭りにおいて、東日本大震災の被災地である気仙沼市の被災企業から仕入れたシャークナゲット

と、熊本地震の被災地御船町から仕入れた特産品やくまモングッズを販売した。同じ年にはほかに東京六大学野球オールスターゲーム in 新発田、新発田ガス展 2016 等へも出店し、東日本大震災への支援と平行して、熊本地震への支援活動に力を注いだ。しばたサマーフェスティバルへの出店は、それらの延長線上にあった。

## 2. サマーフェスティバルへの 3 年間にわたる出店

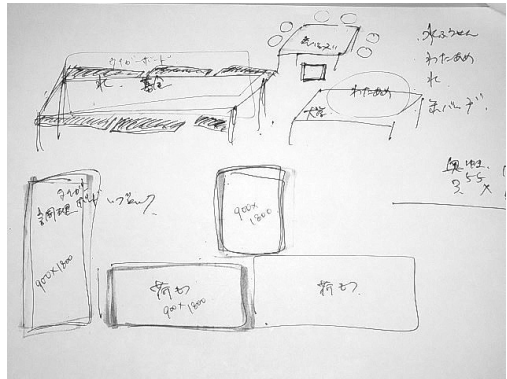
Keiwa HOPE が初めてサマーフェスティバルに参加したのは 2017 年である。毎年 7 月最終週の土曜日に開催されるこのイベントと同時期に、本学では前期末試験が行われる。それゆえ、準備から当日運営、片付けまでのことを考えると、参加できる学生はほとんどいないと思われた。事実、過去にこのイベントの運営ボランティアの募集情報が届いた際も、試験期間と重なることを理由に募集に応じる学生はいなかった。しかし、サマーフェスティバルは Keiwa HOPE がそれまで出店してきたどのイベントよりも規模が大きく、震災復興支援や、本学のボランティア活動を広く市内にアピールする場としてぜひとも活用したい機会でもあった。前年度にイベント出店を繰り返して経験を積んだ学生 HOPE メンバーの多くが出店の意欲をみせてくれた。彼らが出店したいと言い出さなければ、この年の出店はかなわなかったはずだ。そして、その後 3 年間継続して出店を続けることもできなかっただろう。サマーフェスティバル出店の最初の一步であった 2017 年度の経験は、その後、回を重ねていくイベント運営のノウハウを積み重ねていく上でも貴重なものとなった。

サマーフェスティバルに出店するためには、5 月末までに参加の申込書を新発田市メインストリート商店街振興組合（実行委員会事務局）に送る。Keiwa HOPE の出店の目的は震災復興支援であり、売り上げは全額被災地に寄付する、ということを交渉の材料として、通常 8,000 円の出店料を免除してもらった。2017 年度の出店者説明会は 6 月 30 日夕刻から行われ、事務局が参加した。出店内容は、シャークナゲットの販売、水風船つり、わたあめ、缶バッチづくりとくまモン水の販売である。わたあめ機とテントは新発田市社会福祉協議会から無料で借用し、大学からは発電機を持参し、ナゲットを揚げるためのガス機材を業者からレンタル（有料）した。出店の準備は、前年度から数々のイベント出店で経験を積んだメンバーと事務局が中心となった。授業の合間をぬい、わたあめや水風船つりの無料券がついたフライヤーを手作りしながら、着々と準備をすすめた。下記に、事務局が書き残したメモと、会場のテーブル等の配置図、スナップ写真を転載する。

7 月 27 日（木） シャークナゲット受け取り

7 月 28 日（金） 14:00 発電機レクチャー

7月29日(土) 15:00 テント、わたあめ機借用(新発田市社会福祉協議会へ)  
 (学生12名) 15:00 集合、荷物積み込み、会場へ出発  
 (教職員3名) 15:40 会場着、設営  
 16:00 ガス業者くる、セッティング  
 16:00～21:00 出店  
 22:30 撤収、23:00 解散



左からくまモン水、スタッフ、配置図

借用したわたあめ機はキャンディを入れて風味付けすることができたので、子どもたちに好きなキャンディを選んでもらいながら作った。子どもたちが行列をつくり、親子でうれしそうにわたあめをつくる様子を見ることは学生たちにとってもやりがいにつながった。直前に完成したそろいのビブスを着用し、通りかかる人々に向かって、「東日本大震災の復興支援活動をしています」「サメの街気仙沼のシャークナゲットはいかがですか」「熊本地震の復興を支援してください」「わたあめ体験で被災地への支援ができます」と呼びかけた。夏の暑い時期は、揚げ物であるシャークナゲットは振るわなかったが、1回200円(無料券も配布していた)のわたあめだけで40,000円を売り上げ、サマーフェスティバルというイベントの規模の大きさや、「子どもたちが喜ぶ企画」をたてることの有効性をスタッフ一同が共有した。このあと、シグマ学生基金<sup>※3</sup>を利用してわたあめ機を購入し、わたあめ体験は Keiwa HOPE の定番の活動となった。

2018年7月28日(土)に行われたサマーフェスティバルにも出店した。この1週前の7月20日(土)には、Keiwa HOPE 主催の熊本地震復興支援イベント「くまタリアン in しばた」も開催し、スタッフたちは、2週にわたるイベント運営に力を注いだ。前年度同様、5月中に参加を申し込み、被災地支援を行うことで出店料が免除された。出展内容は、恐竜釣り、熊本関連のドリンク販売、宝石すくい、わたあめづくりとした。



2019年7月27日（土）のサマーフェスティバルにも出店した。ここで述べておきたいのは、この活動は、本学の地域連携センターによるプログラムとは別に、Keiwa HOPE 単独での出店だったことだ。なぜなら、出店料を無料にしてもらっていたことや、売り上げの使途を被災地への義援金とすること、過去2年間の活動の結果の積み重ねがあり、大学として全体の中で出店するよりも、単独出店する方が効率的かつ合理的と考えられたからだ。Keiwa HOPE は早い段階で、単独での出店を決め、それまで通りの準備を行った。2017年度、2018年度に活躍したスタッフは卒業していたため、3年次生の学生 HOPE が中心となったが、すでに述べたとおり、イベント出店のノウハウは積み重ねられており、余裕をもって出店することができた。前年度までのスタッフだった卒業生3名も協力してくれた。この時の出店場所は、ひときわ人通りの多い、第四銀行前が割り当てられ、売り上げはさらに伸びた。



★は過去3年間の出店場所

### おわりにー学生が地域連携によって得るものは何か

Keiwa HOPE は地域連携を直接的な目的としていない。しかし、その活動を通して、企業、商工会議所、観光協会、行政、福祉団体など、さまざまな組織とつながり活動の場を広げてきた。特にイベント運営に際しては、主催団体への申し込み、活動内容に関する交渉と確認、広報など、さまざまな準備を行い、当日の運営、決算、報告を通して、学生は「学生さん」ではなく名前のある個人として前面に出ていく。同様に連携先の名前のあ

る担当者とつながることによって、組織と組織ではなく、人と人の関係でつながりをつくっていく。復興支援インターンに参加した山本<sup>2)</sup>は、4年間を通した活動の中で「出会った人や美味しい食べ物に惹かれ、大学生の自分にできることをしたいという気持ちから何度も東北に足を運び（中略）復興に向けて進む町と人を見てきました。行く度に変わる道や増える災害公営住宅、変わっていく景色が多い中で、変わることのない人の温かさが、東北の一番の魅力」と述べている。またイベント運営で広報活動を中心的に担った阿部<sup>3)</sup>は、「私は非常に人見知りで、人の目を見て話すことができませんでした」が、これらの活動を通して「どういった関わり方・話し方をすれば関心をもっていただけるかを考えられるようになった。（中略）イベント出店による支援のスタイルは市民が気軽に参加でき、被害の風化防止につながる。」「インターネットで被災地の物品は購入できるが、意識して検索しなければたどり着かない」、などと述べ、体験が自身の成長につながったことを述べている。

そもそも子どもはその成長過程において、家族や同い年の友人や学校関係者とのかかわりが多く、自ら望んで活動の場を広げようとしなければ別の価値観を持つ他者と関わることがない。特に、もともと人見知りであると自認している子は、他者との関わりに消極的であることも多い。しかし、子どもから大人へと成長し、社会の中で市民として自立するためには、多様な価値観を受け入れ、共存していく必要がある。本学で必修化してきたボランティア体験を通した地域との関わりも、「誰かのために何か役にたつことをしたい」という気持ちを発揮させる機会の創出も、社会とつながる場の提供という意味で重要だと考える。つまり本学のボランティアセンターは、教育機関の中にあること、大学のミッションと強力に結びついていることが重要なのである。地域連携は目的ではなく、ツールであり、そのツールを使いこなすことによって学生が成長し、自立していくことが目的なのだ。

## 註

- 1) 赤澤清孝「大学ボランティアセンターの歴史と動向」『かながわ政策研究 大学連携ジャーナル』No. 11, 2017, 25-28
- 2) 山本果奈「復興支援インターン」, 『VOLUTAS 2016-2018 ボランティア活動報告集』, 2019年, 34-35
- 3) 阿部咲「被災地復興支援の出店に携わって」, 『VOLUTAS 2016-2018 ボランティア活動報告集』, 2019年, 12

Keiwa HOPE の設立の経緯や、これまでの活動については、以下を参照のこと。  
『Keiwa HOPE 2011 年度 報告集』, 2012, 『VOLUNTAS 2011-2015 ボランティア活動報告集』, 2015, 『VOLUTAS 2016-2018 ボランティア活動報告集』, 2019